

目的 江戸時代の染織類には、どのような種類のものがあつたか、それは、どのような形態・縫製方法であつたかとしらべる。

方法 前回に引きつづき、今回は静岡浅間神社に保管されている『御神服調書』名では「御唐衣」とされている遺品ク履を対象とした実態調査である。

結果 遺品ク履の表地は紫地^上生絹で、ク履とも胡粉で胡蝶の描繪が施されているものである。

いずれも単仕立て、ク履とも衽が付けられ、襟中は狭く、6履は袴も単仕立て、鬘置きが付けられたものであり、他の1履は、襟の外回りが輪の衿仕立て、鬘置きの無いものである。

『御神服調書』や『駿國雜誌』名によれば「御唐衣」とされているが、通常の女房装束の唐衣の形態とは異り、大嘗祭や新嘗祭に初饗御親供に奉仕する女官の采女服の場合の唐衣の上に着用する唐衣(掛衣とも呼ぶ)に非常に似た形態のものである。

しかし、この遺品は神様の御神衣であるので、采女服の唐衣のはずはないうえに、采女服の唐衣には鬘置はないので、この遺品は珍しい形態であるので、今後の多くの遺品調査により明らかにしていきたい。